九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

友枝敏雄編，『心と社会をはかる・みる-人間科学への招待-』

中村，晋介
福岡県立大学生涯福祉研究センター | 福岡県立大学人間社会学部

福田，恭介
福岡県立大学生涯福祉研究センター | 福岡県立大学人間社会学部

https://doi.org/10.15017/8045

出版情報：人間科学共生社会学. 5, pp.143-146, 2006-02-10. 九州大学大学院人間環境学研究院
バージョン：
権利関係：

〔書　評〕

友枝敏雄編

『心と社会をはかる・みる ── 人間科学への招待 ──』

（九州大学出版会、2005年、Ｂ５版、282頁、2625円）

中　村　晋　介・福　田　恭　介

本書は、2003年に開催された九州大学人間科学セミナー「人間科学への招待 ── 心と社会をはかる・みる」（10月15日～11月26日）の講義録を、各講師がそれぞれ文章化したものである。

全７回で構成されたこのセミナーでは、心理学、社会学、地理学、人類学の４分野から15名の講師が登壇し、各回、２名の講師による合計２時間の講義（第６回のみ３名の講師による講義）が行われた。編者は、これら４分野からなる人間科学を、「直接ものさしをあてることができない心理・社会・文化・地域空間といったものを測定し、観察することに成功してきた」学問、「20世紀に実証科学・フィールドの知として、飛躍的な発展をとげてきた」学問と位置づける一方で、その成果が人間科学に従事する者以外にはかならずしも認識されていないことを指摘する。

本書／セミナーの目的は、心理学、社会学、地理学、人類学の分野におけるさまざまな実証的研究の成果を開示することで、人間科学が作り上げてきた「測定・観察」の方法を実践的に提示することであった。それでは、われわれは評者として、どのような基準で本書を「測定・観察」すればよいのだろうか。ここで以下２点を基準としてあげてみよう。①分担執筆者のそれぞれが、講義で取り上げた個別事例の内容解説を超えて、おのおのが専攻する学問分野における「測定・観察」の方法を提示できているか、②それぞれの学問領域における専門用語に慣れ親しんでいない読者がこの本を前にした時、「提示」された意図を充分にくみ取ることができたか、である。しかし、われわれ評者たちも大学で教鞭をとっている以上、②に関して安易な評価を下すことは危険である。われわれ自身も難解な専門用語を駆使して授業をおこない、文章を執筆しているからである。今回の書評では、主に①の点から、本書の内容に切り込んでいきたい。

結論から言うならば、ほとんどの講義は基準①をクリアしており、本書の存在意義は極めて高い。一読に値する好著である。

１．心理学分野

心理学分野は第２章、第３章、第４章からなり、章が進むにつれ、基礎的な領域から臨床的領域に行く。心理学においては、基礎的領域と臨床的領域の乖離が指摘されている。基礎的領域から見れば、臨床的領域での話は、実証（数量）的なデータに基づいたものではなく再現性に乏しいと写り、臨床領域から見れば、基礎的領域での話は、データばかりを扱い、現在困っ

ている人の役に立たないと写る。果たしてそうだろうか？ 基礎的な領域においては、人間の心理や行動に関してさまざまな知見が積み上げられ、法則化されている。それに対して、臨床的な領域では現実的な問題に対して、基礎的領域からの知見を敷衍している面が少なくない。ただし基礎的領域と臨床的領域とを結びつける立場の研究者が少ないことは否定できない。そのような視点から見ると、第２章・第３章での内容は基礎的だと考えられ、第４章になると臨床的になり、とくに第３章２講と第４章１講は、基礎と臨床の間を取り持つ役割を担っているような構成である。

第２章１講では、ともすれば測りにくい人の心に対してどのような物差しを考えればよいのかという観点から、心理学実験や心理テストを例としてあげている。ここでは心理学の方法論として、質問に対する回答から、いかに信頼のおけるデータを作り出し、いかにそのデータが知りたいものを測っているかを明らかにすることが求められている。第２章２講では、さまざまに条件を変えながら、実際に感情を測ろうと試みている。これまでの多くの実験の結果わかったことは、感情というものは、たとえば心拍などの生理変化に対するわれわれの後付けの解釈から成り立っていることが少なくなかったということである。

第３章では、われわれのものの見え方について科学的なアプローチがなされる。第１講では、われわれの目は２つあるにもかかわらず、見える世界はなぜ一つなのかという疑問から始まり、われわれの中心に１つの目（サイクロピアン・アイ）を仮定すると、サイクロピアン・アイだけでは解決できないさまざまな問題が生じ、さまざまな錯視を生み出すことになる。このおもしろさは、この本で語られるよりも実際の講義で行われるさまざまなデモンストレーションによってより明らかになったのではないかと推察される。第２講では、浮世絵に描かれた人物の視線をさまざまに変化させることで、登場人物に対する印象が異なるだけでなく、登場人物が持っている意図まで異なって読みとられてしまうという実験結果が提示される。おそらく、コンピュータを用いて、描かれた人物の視線や顔の向きだけを変化させているのだろう。浮世絵内の２人が同じ方向に目を向けていれば、被験者はそこに暖かみを感じるようになる。そこから見えてくる結果はこれまでになく目新しいものである。筆者はこれを感性に対するアプローチだと呼ぶ。

第４章では、子どもの考え方についてのアプローチがなされる。第１講では、さまざまな実証的研究によって、子どもの学びというものが学校教育だけでなく、家族や社会の中でも形作られており、それらをはぐくむためにわれわれにできることは何かを問いかけている。第２講では、子どもの問題行動について、ある事件を取り上げながら、その行動を理解するために、その表面だけをとらえるのではなく、さまざまなシステムが連携しながら支援していく体制が必要であると説く。

このように、心理学の領域では、基礎から応用までその守備範囲は広く、基礎的範囲では自然科学的手法を用いて、人間の認知・行動のしくみについて法則化を試みようとする。臨床的領域では、人間の行動を観察・記録し、それを元に、問題をかかえている人間のために、どの

ような支援や関わりができるかを考えている。さらに、その視点を社会まで広げていくと社会学との接点も出てくる。

2．社会学分野

社会学分野（第５章・第６章）では第５章第１講、第５章第２講、第６章第２講が秀逸である。第１講では、校則に対する高校生・高校教師の意識が「測定／観察」される。まず高校生の校則意識と、高校教師の意識が対比的に「測定／観察」され、続いて、高校生に限定して、「学校階層上の地位」と校則意識との連関、高校教師の管理職志向と校則意識との連関が検討される。校則意識とは、秩序維持のために校則を必要と考える校則擁護論を一方の極、校則はできるだけ少なくして生徒の自発性に任せるという校則縮減論をもう一方の極に置く理念型的な尺度で「測定」され、連関の有無は、この校則意識を従属変数に置いたパス解析によって「測定」される。第２講では「電車やバスの車内で携帯電話を使って話しこむ」「電車や店の入り口近くの地べたに座る」といった、近年問題になっている（主に若者に見られる）行動に対する、高校生の認識／抵抗感、高校生の社会観（国家観、ナショナリズムなど）が「測定」される。第６章第２講では、「日本の高齢化」にまつわる言説が俎上に載せられる。担当者は「質的データで社会を読むという作業」を「概念の意味を現実とつき合わせながら、その語用と用いる人の意志に即しながら、文脈的な論理をたどって解釈する」ことと定義し、「日本の高齢化を語る言説の歪み」について論じていく。文脈をたどる場合のガイドラインとして例示されるのは「浦島太郎」や「八百比丘尼」「姥捨て」「隠居」「親孝行」「適齢期」といった、一般市民にもなじみが深い単語である。執筆者はシンボリック相互作用論を参照軸としているが、この論考はそこに留まらず、「意味学派」と称される社会学一般に通底する基本的な発想をうまく開示できている。

これら３つの講義に対し、ＮＰＯを論じた第６章第１講は、「観察」（ＮＰＯの定義や機能、特定のＮＰＯの活動内容紹介）という点ではじゅうぶんに水準をクリアできているが、ＮＰＯを分析する場合に特有の「測定」法の開示という点においてはやや不満が残る。しかし、ＮＰＯの定義や機能が未だ「知る人ぞ知る」状態であるわが国では、聴衆にとって極めて有益な講義であったことは想像に難くない。

3．地理学分野・人類学分野

地理学（第７章）の第１講・第２講は、いずれもこのセミナーが開講された福岡市を直接のフィールドとするものであり、聴衆の生活に密着した興味深い事例（福岡都市圏の発展、第43回衆議院総選挙の得票結果から見る地域間の差異）を豊富な地図・資料で提示したことに意義がある。第３講は視点をズームアウトして、九州全体の製造業（半導体関連、自動車関連、金型製造など）の分布を論じている。第１講が福岡市の通時的分析、第２講は福岡市の共時的分析という点で対をなし、これらが九州全体を対象にした第３講とさらに対をなしている。この

構成それ自体が、「場所によって異なる諸特徴を明らかにし、そうした特徴がもたらされる要因を説明すること」と規程される地理学の射程を聴衆に理解させるデバイスとして機能していることも注目に値する。

人類学分野（第８章）を構成する２つの講義は、福岡市で学生生活を送った評者たちには非常に興味深いテーマであった。特に第１講で取り上げられた山笠文化（特に身体技法）の伝播、第２講で取り上げられた「老化するお金」概念は、それぞれ１本ずつ書評を書きたくなるほどに興味深いものであった。即ち「観察」の側面では完全に水準をクリアしていると言える。しかし、残念なことに「測定」の水準がやや弱いと感じたのは欲張りすぎだろうか。心理学、社会学、あるいは地理学とは異なる、人類学に固有な「測定」方法に関する講演者の意見をもう少し拝聴したいところであった。

さて、最初に述べたように、本書のような文献を評する場合には、もう１つの評価基準が存在する。それは「アカデミズム内部で流通する言説に必ずしも慣れ親しんでいない読者がこの本を前にした時、『提示』された意図をどの程度までくみ取ることができるか」という基準、要するに「わかりやすいか」という点である。しかし、最初に述べたように、大学で教鞭をとる評者らの理解度を基準に、聴衆の理解度を推し量ることは困難である。よって、この点に関して深く考察を加えることは差し控えたい。

ただ、評者らの個人的経験（講演、公開講座など）を基準に推察するならば、専門用語に関するかみ砕いた説明をコラム的に付け加えれば、本書の「わかりやすさ」は倍増したものと思われる。「統制」「因子分析」「分散分析」といった統計学・実験測定法に関する単語のみならず、「原因帰属」「マネージ」「グローバル化」「社会的属性」「セクター」といった、大学という「象牙の塔」内部では普通に使われている単語もまた、「塔の内側」に住まない人びとにとっては耳慣れない単語である。編者は「あとがき」で「初学者には少々難解に感じられるかもしれません」と断っているが、もう少し工夫できたかも知れない。最近、極めて高度な科学的発想や理系における研究成果を、徹底的にかみ砕いて説明するテレビ番組を見ることが多くなった。このようなことから考えると、大学もまた、その存在意義を社会に認めさせるために、各研究を「わかりやすく」伝えること、それぞれの研究が相互にどのように関連し、そこからどのような新しいパラダイムが生まれてくるかを予見させるような情報提供の場となる講座を今後も開催することが望まれる。